想に疑問を持つ人に、解決の糸口を与えてくれる。さらに医学だけでなく道教、儒教、仏教などまわりの歴史にも配慮した著作である。

この書は旧活字で組まれている。また英語目次と索引が完備している。巻頭の山田慶児氏の「論集に寄せて」も著者をよく知る人として重みを持つ。中国医学に興味を持つ人に、この労作を広く勧めるゆえんである。

（猪飼　祥夫）

〔関西大学出版部：〒五六四―八六八〇　大阪府吹田市山手町三―三―三五、電話〇六―六三六八―一一二一、平成一一年九月二十五日、A5判、四三二頁、本体価格七、〇〇〇円〕

坂井　建雄　著

『謎の解剖学者ヴェサリウス』

「アンドレアス・ヴェサリウスとは誰か」と訊かれると、「近世解剖学および医学の祖」とか「人体解剖学の歴史的大著ファブリカの著者」と答える人は多かろう。

しかし、謎に包まれた彼の生涯やその著ファブリカについては、あまり知られていない。

ヴェサリウスという大学者が、どのような時代的背景の中で、何の因果によって出現したか？　ヴェサリウス以前の解剖学はどのようなものであったか？　旧態依然たるパリで解剖学を学んだ若干二二歳のヴェサリウスが一五三八年に一挙に名門パドヴァ大学の教授に抜擢された真相は？　彼が人体解剖にかけた熱意と努力の源泉と解剖の方法の特色は？　七〇〇頁を超える画期的な大著ファブリカ（一五四三）やその要約ともいうべき名著エピトメー（一五四三）が生まれたいきさつは？　ファブリカやエピトメーの内容の詳細は？　今までの書とは質量ともに格段に異なる素晴らしい図を配し、局所解剖学的な思想（腹部内臓、胸部内臓、頭部臓器）に加えて、画期的な系統解剖学的な思想（骨格、筋肉、血管、神経）を駆使したこの書の出現が、後世の解剖学と医学の進歩に果たした大きな役割は？　この書が革命的といわれた所以は？　このような学問的な革命がヴェサリウスという人物を通して起こった所以は？　ファブリカとそれ以前の解剖書、たとえば、二世紀のガレノス（ペルガモン）、十一世紀のアヴィセンナ（アラビア）、一四世紀のモンディーノ・デ・ルッツィ（イタリア）、一六世紀前半のベレンガリオ・ダ・カルピ（イタリア）などの解剖書との類似点と根本的な相違点は？　ヴェサリウスの書がガレノスを踏襲（とくに血液循環についてはガレノスの思想を脱却していない）しつつも、革命的な書として高く評価される理由は？　彼の業績が近代の医学や医療の進歩のあり方に及ぼした影響は？　現在、ファブリカのオリジナルは、世界各国やわが国にどのくらい残存しているのか？　海賊版や復刻版は？　ヴェサリウスの生い立ち、人となり、生涯は？　人間の能力、偶然、必然、運命などが世界の歴史や個人の人生に及ぼす不可思議な作用は？

本書には、このような興味尽きせぬ多くの謎がきわめて自然に提供され、具体的に、わかりやすく解かれており、歴史の面白さを味わわせ、考えさせてくれる。

ちなみに、パドヴァ大学をわずか五年あまりで去った彼は、スペインの宮廷の侍医になって活躍したが、解剖学についても情熱を持ち続け、一五五五年には改訂版を出している。そして、パドヴァの次の次の教授であるファロッピオの死（一五六一）の後に、もう一度解剖学の教授に復帰したいと欲したが果たさず、イエルサレムの聖地からの帰途、ザンテ島（現在のザキントス島）で、四九歳（ザンテ島にある墓石には五八歳と彫られているという）で孤独な死を遂げるなど、後半の足跡にも謎が多い。

肩を凝らさないで読める、やや小型（B六判）の本書を一読すれば、優れた解剖学者、組織細胞学者であるとともに、深い学識と教養と慧眼を備えた著者が、遠い昔の古書のオリジナルを繰り、多くの文献を渉猟し、歴史的な背景をよく調査して書かれた名著であることがおわかり頂けよう。

解剖学や医学の歴史に関心のある方はもとより、医学生、医師、自然科学の研究者、一般の方々などに広くおすすめしたい本書は、人間の創る自然科学が、どのようなファクターにより、どのような曲折を経て発展してゆくかの生きた実例を示しているといえよう。とくに医学生にとっては、必読の教養書である。

本書をひもどくとき、医学、解剖学の発展に革命的な影響を与えたヴェサリウスのファブリカやエピトメーが、突然無から有が生じることによって誕生したのではなく、ヴェサリウスが古代からのガレノスやアヴィセンナやモンディーノらの解剖学をよく学び、その基盤の上に立って、自らの手を汚し自らの眼でつぶさに人体を観察した結果、いわば人類の築いてきた学問を、自身の努力によって得た解剖的観察によって止揚（aufheben）した結果、生まれたものであることが具体的に理解できよう。

蛇足ながら、最近、日本の若い世代の教育において、個性とか独創性という言葉が誤用されて、基本的な学問の修得を軽視する傾向にあることを、私は悲しむ。

独創性や個性は、決して無から生ずるのでなく、普遍的な基礎的知識を身につけ、その上に立って生まれてくるものであることを、本書から具体的に学び取ってほしい。

ともあれ、楽しく読める、示唆に富んだ、素晴らしい本である。

（藤田　尚男）

〔筑摩書房：東京都台東区蔵前二―五―三、平成十一年十月十二日、B6判、一九八頁、本体一、二〇〇円〕

ヴォルフガング・ミヒェル 著

『ライプツィヒから日本へ』

本書は、カスパル流外科の開祖といわれるカスパル・シャ